

高崎山の野猿

堀 合 文 子

朝、会場へいく時、

電車の中から、「只今は〇四」というのが大きい板塀の様な立札に書かれているのが目に入った。何かしらと不思議に思つてその場は通り過ぎた。

これが高崎山自然動物公園の入口なのである。丁度別府と大分との間、三分の一位別府よりの所にあり、前は広々とした別府灣、電車がその海に面して走り、その後が高崎山で、見上げる位の、木のこんもりした、深山でもないが木がうつそうとして、見ただけで獣が住んでいそうな山である。その木々も丁度、赤、緑、黄、うす緑を色とりどり美し

く紅葉している。

研究集会の三日目の午後、愈々高崎山を觀光する事になった。「只今〇四」というのはその日の猿が山から遊びに出て来ている匹数で、その都度、觀光客にしらされるわけで、朝、昼、晩と匹数も違う、二時位が一番多いとの事だ。接角、觀光するのに〇四ではと案じたが、幸その日は晴天で、只今一五〇四とある。ありがたいと思つて、愈々自動車を下りて入口へ。入口は例のようにお土産物の売店が三四軒両側へ軒を並べ、その家のおぼさん達が店先に立ち、お土産物はさておき、手にぶらさげているのは猿のえさのみかん、南京豆を袋に入れ、「お猿さんのえさいかがですか。お猿さんのえさいかがですか」と、觀光客の側へ互いによつてくる様にして奨める。私共はそれへお猿にお土産をかった。みかんのの方がよろこぶのだそうだ。売ってしまうとおぼさん達は「かくしていつて下さい。かくしていかないと、とびつかれて危いですよ。」そうかしらでもやらなければいいのぢやないか」と皆も思ったのか仲々しまわなかつたが、おぼさん達の強行さで皆コートの中側へお土産物はかくされた。

その道は次第に坂になり石だんになっていて両側が林だ。

「いる」「いる」林の中に、石だんの途中に五六匹、ちらほらと遊んで、お客様を出むかえている。「あゝ、いるわ、あそこにも、こゝにも何だかよつてくるようだ。少しうすきみがるい。お土産みつけれられたのかしら。」よつてくると又お土産を一しょうけんめいかくした。「これだめだよ。おあいにく様。」一人の先生がお土産をみつけれられてとびつかれたらしい。

お寺の石だんのように整備されてはいないが野趣的なこの段々をどん／＼登ると、境内のような広い所へ出た。

「いる、いる、いる」そこは猿の運動場のように、山を背景にしたこの運動場で、沢山の猿が、とびまわり、かけまわり、つるさがり、おいかけたり、はしりまわり、して遊んでいる。又お客様からごちそうをもらつて一しょうけんめい食べたり、皮むいたり、している。私共はこの運動場へ入つていった。

窓は別に私共大勢押かけても何くわぬ顔。なれたもので、自分達の生活を平然としてい

る。

一匹の猿は、木の枝から枝へ結びつけた綱の所をつなわたりしたり、片手でつるさがつたりして、お客様をよろこばしている。

「可わいい！」小さい子供の猿が、お母さん猿のまわりをぐるぐるまわって遊んだり、お母さんの背中にしがみついたり、一しょになつてごちそうを食べたりしている。お母さん猿は、子供の事は一向おかまいなく、いきたい時、いきたい所へ動いていくので、子供猿はおいていかれるかと懸命に背中や、お腹にしつかりぶるさがつており、お母さん猿はそのまゝ平気で方々へとび歩いたり又お腹のお乳にすいつかれたまゝのそくあるいたりしている。子供の方が生きる事に懸命でお母さんは一向にかまわない。

ばら／＼と南京豆を三粒ほどまいてやると中で大粒のおいしそうなから食べる。ちよつと角がくさつたりしているとちよつとみてすて／＼しまう。仲々利巧だ。

みかんの皮も実にきょうにむく。幼稚園の図兎でもこんなに上手にむけないだろう。南京豆も外側の皮はちゃんとむいて捨てる。仲々きょうだ。

「ぎ、き、き、き」突然けたたましい

声が聞えた。何だろうと思つてみると、一匹の猿が親分らしい猿二、三匹に追かけられている。何か食物の競いらしい。目のせいかその猿は少しやせている。しばらくすると又ぎ、き、き、き、きといつてすごいスピードで追いつ追いかけていける。ちよつとぶきみだ。猿の世界の生存競争がこゝにみられるのか、やはり勢力の強い猿がいて、暴力を振うらしい。S先生は猿の世界も仲々すごいものですなあと感じていらした。

一体に、こゝの猿は観光客のやるえさの為かまるまると肥っている。

「あらいやいやよ」一人の先生のスカートのすそを引っぱつてえさの催促をしている。「あ、これこれ、ずるいやつだ」そばでおいしそうにみかんをむいて食べている。うっかり持つてお話をしていたら、すつと持つていかれたのだ。仲々よくみてる。

こうしている間も私共の間を所せましとそれぞれ遊んでいる。山の中腹か、山際の所に佛寺の屋根がみえる。その上にも二匹、日向ぼつこか、のんびりと座っているのと、時折のそりのそり歩きだしているのがある。年寄

なのか、見はりでもしているのか。

猿の世界も、気ぜわしく常に活動しているものと、のんびり大勢を眺めているものと種々あるらしい。幼稚園、学校制は引かれてないようだが。

この猿達は、昔、高崎山に沢山すみ、時折出て来ては町の農家の作物をたべあらすので、この御寺、万寿寺別院のお坊さんが手なづけてこのように自然動物園の形にしたのだそう。現在は実によくなれていて、人間よりむしろ平然としているようだ。年々繁殖して、将来、世界的なものになる事を希つているとの事だ。

この様子を幼稚園のお子さん達にみせたいものだ。猿の生活が実によくわかる。習性も又わかる。せめてこの話だけでもよく伝えてあげようと考えながら山を下りた。林の中に二、三匹、ちらほら遊んでいる。社会性に乏しい猿かしら。見送つてくれるのか出口の所までも遊んでいる。

(お茶の水大附属幼稚園)